



ゆーごーけん

2012. 9. 5

マーク制作：関知磨子（秋津コミュニティ：蚊帳の海一座）

（融合研のホームページ） <http://yu-go-ken.net/>

（事務局）〒285-0843 千葉県佐倉市中志津7-17-4（TEL&FAX）043-463-1929

本号の内容

○巻頭言；「K先生の退職慰労会」

融合研会長 宮崎 稔

1 「融合フォーラム2012 in 東北」の概要決まる

○本フォーラムは、被災地である東北で私たちができることは何なのか、何をしなければならないのかを語り合うと共に、日本の新しい未来に向けた具体策を確かめ合って行きます。

若者たちの未来への強い思いを受け止め、具体的活動として発展させるために、学校と地域の融合教育研究会（融合研）が積み重ねてきた研究成果をバネにし、復興を目指して共に歩む取り組みを創造するものです。

2 「東日本大震災支援実行委員会」から

○支援の様子（抜粋）

すでに、メール会員にはその都度報告してきましたが、その抜粋したものを掲載します。

○会計報告と寄付のお願い

- ・寄付をありがとうございました。上記の活動に使用した資金の会計報告です。
- ・また、昨年寄付金額はほぼ全額を使い切りましたので、改めて今年度の寄付をお願いいたします。

○「こんなことで支援できます」の登録のお願い

会員の中には、例えば「本の読み聞かせができる」「工作が指導できる」等々、それぞれに特技等をお持ちの方がいらっしゃいます。大阪フォーラムでは、「23講座」もの店を設けて実施し、子どもたちに喜ばれました。その例に倣って、被災地でできることがあるかどうかを登録していただきます。

3 大阪フォーラムの報告

○全体会、分科会報告

○大阪フォーラム」のDVD申し込みをしてください。

4 役員会の報告

○総会について

- ・出席できない場合の意思表示について
- ・事業報告・会計報告
- ・事業計画・予算案
- ・役員選挙
- ・その他

5 事務連絡

○会員継続の登録をお願いします

○大阪フォーラム」のDVD申し込みをしてください。

○2013年度以降のフォーラム開催の立候補・役員立候補を受け付けます。

私が秋津小学校の校長だった時に他校から転勤して秋きたK先生が定年退職したということで、過日、異例の退職慰労会が行われました。何が異例かと言いますと、

- ① 千葉県でも郡部等の学校では退職したときに慰労会をすることもありますが、習志野地区の常識では退職しても慰労会は行わないことになっています。
- ② 仮に行われても、最後の勤務校で行われることが普通ですが、K先生は秋津小を最後に退職したのではなく、もう10年も前に他校へ転任していたのです。
- ③ それにK先生は、秋津小では教務主任はしたことがありますが、管理職ではなくいわゆる「普通の」先生であったこと。私の知っている慰労会では、管理職で辞めた人だけが行われることが慣例でした。
- ④ 何よりも異例だったことは、教員が主催したのではなく「地域の有志」が集まって開催したということです。当日は、近く中華料理店に50人も集まったでしょうか。とても賑やかで、10年以上前の話に花が咲きました。保護者やかつての同僚の先生もいましたが、ほとんどは忙しい中でも時間をつくって集まってくれた地域の方でした。

K先生がいかに地域から愛され信頼されていたかということ、当然ながら子どもたちや保護者からも同様だったろうことは疑う余地のないことです。改めて申し上げます、なにしろ転勤してから10年も経つのです。10年経っても地域の皆さんの心に残っていて、賛同する人はどんどん増えたのだらうと思いますし、都合がつかなかった人はさぞかし残念だったのではないのでしょうか。

そして、この慰労会は多くのことを示唆してくれました。とくに教員の評価という視点から述べますと、最高の評価を得ていた教師であったと思います。今、教育界でも人事考課制度が導入され、給料にも反映されているところもあるようです。制度として必要なこともあるでしょうが、教師の評価は、第1に、子どもからのものです。それが、保護者の目線につながって保護者からの評価、そして、地域からの評価になることが多いものです。評価については、どんな業界でも「本当に正当な評価なのだろうか」と評価する側の能力が問題になることがあります。教師の場合も管理職がするものもありますが、本当の評価は多くの子どもがするのですから客観性もあって正当です。K先生は、最高の評価をされたといつてよいと思います。

教員への評価は退職したり転勤したりしても続きます。教え子だった子たちに何処かであっても目を背けられる先生と遠くからでも寄ってきてもらえる先生、また結婚式や同級会に呼ばれる先生と呼ばれない先生に分かれます。担任だった時はいろいろな関係で我慢していた子供たちも、卒業してしまえば、もう担任ではなくなったのですから自由に決めることができます。教えていたところの結果はこういう形でも評価されているのです。

話は少しそれますが、教え子は同じくらいの年齢ですから、結婚式などは重なることがあります。毎月のように呼ばれたりすることがあります。そういえばK先生が、一時「結婚式のお祝いだけでもたいへんだよ。」とうれしい悲鳴を上げていたのを思い出しました。

また地域からも評価されます。その評価はシビアです。保護者や子どもと違って、担任でもないので利害関係がありません。それに多様な業界で活躍している方たちですから、多様な視点があります。ハッキリ言って怖いものがあります。だからオモネルというわけではありません。そんな薄っぺらな態度は地域の人には簡単に見破られてしまいます。毅然と自らの教育観に沿って子どもに真摯に寄り添えば、正当な評価はおのずとついてきます。

地域との融合で教育活動をする事が多くなった今、教師には一層厳しい目が注がれていますが、逆に言えば、良い教育を行えばK先生のようにそれだけ多くの方から信頼され、いわばやり易い教育を実践することができるのだと思います。

1 「融合フォーラム 2012 in 東北」の概要決まる

東日本大震災から学社融合によって立ち上がっている状況を発表していただきます。今回は、文部科学省の全国生涯学習ネットワークフォーラム 2012 の参加事業として取り組みます。



全国生涯学習ネットワークフォーラム 2012 参加事業

第16回 融合フォーラム in 東北 2012 要項

1 趣旨

東日本大震災から1年半、被災地では、日本全国・世界各国から様々な形での支援をいただきました。今、少しずつ復興に向けた様々な取り組みも生まれており、若者を中心とした多くの活動が注目を集めています。

本フォーラムは、被災地である東北で、私たちができることは何なのか、何をしなければならないのかを語り合うと共に、日本の新しい未来に向けた具体を確かめ合って行きます。

若者たちの未来への強い思いを受け止め、具体の活動として大きく発展させるために、学校と地域の融合教育研究会(融合研)が積み重ねてきた研究成果をばねにし、復興を目指して共に歩む取り組みを創造するものです。

2 主催・共催

主催:学校と地域の融合教育研究会

共催:文部科学省・仙台市教育委員会・嘱託社会教育主事研究協議会

後援:宮城教育大学・仙台市PTA協議会・公益社団法人こども環境学会・日本教育新聞社
社団法人農山漁村文化協会・警察政策学会・公益社団法人さわやか福祉財団

3 主題 「大震災から希望へと持続可能なまちづくり、ひとづくり」

～ その手だてとしての学社融合 ～

4 開催日時 平成24年10月20日(土) 13:00～ 21日(日) 12:30

5 会場 仙台市立旭丘小学校 及び 仙台市旭丘市民センター

〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3丁目27-1

6 参加者 一般(地域住民、PTAなど)・学生・融合研会員・嘱託社会教育主事・学校関係者など

7 日程・内容

10月20日(土) 【1日目】

12:20～12:50 開会行事 アトラクション(歌とメッセージ)

- ・ 挨拶 実行委員長 野澤令照(融合研副会長)
- ・ 祝辞 文部科学省 審議官 上月正博氏

13:00～14:30 鼎談「東日本大震災 復興へ、そして未来へ」

仙台市教育センター主幹・前石巻市立雄勝中学校長 佐藤淳一氏
ガールスカウト岩手県連盟長・元宮古市教育委員長 平井ふみ子氏
海楽寺(仙台市若林区)住職・仙台市立鶴巻小学校教諭 大友雄一郎氏
学校と地域の融合教育研究会長 宮崎 稔氏

※震災直後からの復興への歩みを振り返り、今後私たちがどうすれば良いのかを共に考える。

14:30～15:00 活動報告・交流会

活動紹介のパネル展示を前に、自由に交流する場とする
融合研恒例の屋台のイメージで

15:00～17:20 ワールドカフェ

「タフでしなやかなまちづくりのために、今、それぞれができること」

- ・IMAYO
- ・4-LEAVES
- ・JACK IN ∞sMiLE(ジャックインスマイル)
- ・ドットジェーピー
- ・ジュニアリーダー
- ・高校生ボランティア団体

・被災地学習支援ボランティア(宮城教育大学他)等
司会:石垣 恵 趣旨説明:堤 裕子 進行:春日川 孝
全体総括:融合研会長・副会長
ファシリテート:学生、社会教育主事、融合研会員 等

※ 最初に、若者団体の紹介を聞く

※ 1~3ステージでグループのメンバーが入れ替わりながら、テーマに迫る

17:20 ~ 17:30 1日目の閉会

18:00 ~ 若者との交流・懇親会 会場:旭丘市民センター

10月21日(日) 【2日目】

9:00 ~ 9:10 2日目の開会

9:15 ~ 10:50 分科会

【復興に向けて活動を続ける若者たちと多様な地域活動に取り組む大人たちとがコラボレーションを図る機会として位置づける。】

(1) 学社融合で取り組む復興教育 【復興につながる実践の事例を取り上げる】

＜全国生涯学習ネットワークフォーラム 2012 宮城分科会へつなぐ 11/3,4＞

- ・ 仙台市立吉成小学校 復興教育プロジェクト
- ・ 厚木市相川小学校と森の里地区 被災地交流
- ・ 宮古市立鎌ヶ崎小学校 復興への歩み

コーディネーター:岸 裕司融合研副会長・千葉県習志野市

(2) 豊かなコミュニティづくり 【コミュニティづくりの実践事例を取り上げる】

＜福島分科会へつなぐ 11/10,11＞

- ・ 千葉県習志野市・秋津コミュニティの実践
- ・ 大阪府河内長野市立美加の台小中学校区
- ・ 学びのコミュニティ事業(旭丘・開催校区)

(仙台市立東六郷小学校の地域復興プロジェクト)

コーディネーター:宮崎稔融合研会長・千葉県佐倉市

(3) 未来へつなぐ人づくり 【人材育成の視点から、実践事例を取り上げる】

＜岩手分科会へつなぐ 11/17,18＞

- ・ 岩手のキャリア教育(NPO みらい図書館)
- ・ 大阪府池田市立池田中学校の実践
- ・ 仙台市の人づくり 元気アップ事業

コーディネーター:油谷雅次融合研副会長・大阪府貝塚市

(4) 放課後も休日にも多世代交流 【地域における多様な交流の実践を取り上げる】

- ・ 大阪府羽曳野市立羽曳が丘小学校PTAおやじの会
- ・ 仙台市立東六番丁小学校のまちづくりプロジェクト
- ・ 宮城県花巻市(旧東和町)りんご丸かじり事業

コーディネーター:種田祝次融合研事務局員・千葉県習志野市

11:00 ~ 12:00 全体会(報告)

各分科会で話し合われたことを全体で共有する。

コーディネーター:矢吹正徳融合研事務局員・日本教育新聞社編集局長

宮崎道名会員・道屋主宰

4分科会のコーディネーターも登壇

12:10 ~ 12:30 閉会行事

12:30 ~ 13:00 融合研総会

8 参加費 会員 1,000 円(大会資料『年報 学社融合 2011』代込み) 非会員 2,000 円(資料代込み)
会員外の登壇者 1,000 円(資料代込み) 学生 500 円 スタッフ 1,000 円
※20, 21 日昼食代 各 500 円(お茶付き)

- 9 懇親会費 3,000円
10. 宿泊費 6,200円
11. 参加申込 宿泊を伴う場合 9月28日(金)まで 宿泊希望しない場合 10月5日(金)まで
12. 担当者 仙台市立寺岡小学校 教頭 木村 茂
TEL 022-378-7577 FAX 022-377-8402 〒981-3204 仙台市泉区寺岡2丁目14-1

※申し込みは、①会員には、メーリングリストで ②ホームページにも掲載 という形をとります。申し込みを受け付けますと、「受付票」が届きますので当日それをお持ちください。(無くても受け付けは可能です。また宿泊を除き当日の受付も可能です。会員でない方も参加できますので、是非お誘いください。)
※当日会費¥3000(年会費のみ)を払い会員になれば、フォーラム参加費は会員と同じ¥1000 になります。

2 「東日本大震災支援実行委員会」から

「学校と地域の融合教育研究会東日本大震災復興支援実行委員会(委員長:矢吹正徳融合研事務局員)」が組織されて1年が過ぎました。この間、被災地域のみなさんとの交流を通じた直接的な取り組みが行われました。もちろん融合研は、「被災後のまちづくりへの貢献」が会の趣旨に沿うものではありませんが、この1年間はその前提としての交流に重点が置かれました。そのために同じ地域へ何度も出かけて、多くの人と顔見知りになりました。これからは、被災地の人から望まれて、融合研の持つ「まちづくりのノウハウ」等での貢献が期待されるところです。

○支援の様子(抜粋)

【第1団】

(1) 2012年5月1日(日) 8:30 原発の被害を感じて千葉へ逃げてきていた息子夫婦と孫それに嫁の母とともに福島県の郡山市へ戻りました。壊れた家が立ち退きをしなければならぬので、荷物の片づけが目的でした。途中の利根川沿いは、千葉側も茨城側も屋根にブルーシートで覆われている家もありました。また電柱の傾いたままのところも少なくなく、土嚢も片づけられてないところもあり水辺は液状化のために地盤がゆるんだことが原因だろうと思われました。

郡山市内は人通りも少なく、マスクで顔を覆っていた人がほとんどでした。石積みの塀がくずれたり壁がむき出しになっている家も多く、近くを歩いていた人は危なかったのではないだろうかと思いました。また重機を見かけることが少なく、復興のために業者がフル回転をしても間に合わないのだろうと思いました。息子の家は壁や天井が落ちていましたが、柱等はそのままでしたので被害は少ない方だろうと思いましたが、崩れてきたときに家にいてその場面に直面した孫や嫁が今でも怯えているのは仕方ないことで、こういう人がトラウマを抱えて余震にも怯えながら生活しているのだろうと感じました。

片づけは息子夫婦に任せて岩手県紫波町へ向かいました。途中の東北自動車道はすいていました。福島県内と宮城県内は路面の凹凸があり、土嚢が積んである路肩もあり補修したばかりだということがよくわかりました。でも岩手県内に入ると道路は平らで、「岩手は地盤が強いので地震だけなら被害は少ない。」と言った地元の人言葉も納得できました。

紫波町では藤尾会員の計らいで、盛岡フォーラムで司会をしてくれた校長や学社融合支援グループの方とも会い、今後のことも含めていろいろと話しました。

①岩手県では本当に必要な物資を救援できるようにと、被災地の学校とそれほどでなかった学校とを姉妹校に指定して、学校同士の相対での協力関係を結んだということ。これには、その後も支援物資の偏りがあるので、他の地域でも実践すると良い効果的な方法だと感じました。

②しかし、支援というよりは「観光目的で」見に来るというやじ馬で道路が渋滞するということを知り、何が支援なのかを考えさせられました。

③私は融合研としては、保護者を亡くした子のために地域ぐるみで里親になることが永続的な支援になるのではないかと考えていたのですが、「里親制度」は、研修を積んだ人しか出来ないというような法の壁が厚く、難しさがあるということを感じました。でも、なんとか方法はあるのではないかと今でも思っています。

④一方、東北では親類関係が濃いので災害孤児になる子は少ないということを知り、全体的に薄れかけている血縁関係の大切さを思い知らされました。

※紫波町の電気・水道やガスも全く正常で、建物等の被害も感じられず、見た目には日常生活に影響は出ていないようでした。この夜は、紫波町内のホテルに泊まりました。

5月2日；宮古市と山田町でのことです。

○岩手県宮古市で；

盛岡市から、まぶしい程の新緑と満開の桜が咲く山道を走っていると、どこに震災の影響が出ているのかと思えるほどでした。ところが海沿いに出ると景色は一変。がれきとつぶれた車や家、打ち上げられた船が至る所にありました。わずかに残っている家も1・2階は柱だけという状況。壁には、「こわしてください」とか「解体OK」や「O」が赤ペンキで描かれている家が多くありました。住み慣れた我が家を、このような形で失うことにどんな気持ちであったろうかと涙が止まりませんでした。道路は車が走れるように片付けられていましたが、そのためにうず高く積み上げられたがれきとそれを仕分けするわずかの重機。重機が足りないという現実を見て、復興にはどのくらいの年月がかかるのだろうかと思いの遠くなる思いでした。

宮古市役所で山本市長（融合研会員）にお会いしました。「きょうは天皇がいらっしゃる予定でしたが、強風のために延期になりました。」ということで、市長室で30分ほどの懇談をしました。

①学校は高台が多いので、1か所を除いてすべて残っていること

②仮設住宅は小学校の校庭に、中学校は部活の関係で使わないこと

③コミュニティを残したままで仮設を配置したいということ

④漁港が再開して、雇用の機会が増えたこと。しかし、臨時職員を雇っても永続的ではないので厳しいということ。

⑤仮設住宅の用地は、「できるだけ近くにしてほしい」という要望が強いので、確保に苦慮していること

⑥自衛隊の復興支援がありがたかったこと

等の話を聞きました。融合研は何ができるだろうと思案しましたが答えは全く見つかりませんでした。

○岩手県山田町で；

言葉を失うという経験を初めてしたように思いました。湾の流域は200メートルぐらいなのに、長さは5キロメートルぐらいはあったでしょうか、その湾沿いに町が続いていました。ここでもほとんどの家が流されて、わずかに鉄筋の建物の1・2階が柱だけ無残に残っていました。テレビの画面で見た風景が一面に広がっているのです。そうして、どこから漂ってくるのか異様な臭い。聞くと「冷蔵庫や冷凍庫の中の物や海辺なので魚も多く、それらが一緒に腐っているのですよ。」とのこと。ああ、夏になったらどうなるのだろうと思いつつ役場へ行くと、長蛇の列。間もなく救援物資の配給があり、見ていると一人が手にするビニール袋の中には、カップ麺とおにぎりが一個ずつだけ。宮古市ではもっとあったと思うのに隣の町ではこの状況。物資の偏りが疑問になりました。

ガールスカウト活動をしている平井二三子会員が、避難所へ靴を150足持っていき「合うのがあったらどうぞ。」ということを送った全部さばけたというので、私が持って行ったわずかばかりの物資もそうしようとすると、「個人的な救援物資は平等性を考えると困る。おいて行かれても仕分けの関係でいつ渡るのか分からない。」というので、裏通りを通りかかったお年寄りご夫妻に「よかったら受け取ってください。」と米2合ずつをこっそり渡すと、「ありがとうございます。助かります。」と何度も礼を言われました。そうして、車に積んでいったものを全部渡すことができました。

○再び岩手県宮古市（赤前小避難所）で；

紫波町で紹介された校長の学校が避難所になっているというので、そこで一泊することになりました。「行政が優先的に学校の耐震化に取り組んでくれたので、ほんの数ヶ月前に全部の学校の耐震化が完了し、倒れた学校は一枚だけでした。先見の明ですねえ。」という言葉の背に体育館に入ると、医療チームがきちんと配置されていることにまずホッとしました。また連休中ということで、全国各地から駆けつけた車や若いボランティアの数も多く、「最近の若者は・・・」という風評もある中でうれしくなりました。体育館は、高く積まれた救援物資の山。「これらはもう使わなくてもすむかもしれませんが。でも足りない物もあるんです。仕分けをしてくれるボランティアの数も足りないし・・・。」という職員の声。情報化の時代だということに、せつかく届けてくれた物資が有効に回らないということにここでも疑問がわきました。

避難所での私と雅子さんのスペースは、2畳ほど。床にはマットの上に毛布が敷かれ、それほど堅くは感じませんでした。毛布は十分にありましたが少し寒く、被災直後はどんなに厳しかったろうかと考えるとここでも涙が出ました。寝付けぬ人や幼児のぐずり声、夜中にトイレに立つ人の足音、朝は早く目が覚めた人の気配・・・と、一晩でも厳しいと感じたので、それを長く続けていることに早い復旧を待ち望む気持ちが十分に伝わって来ました。

校庭には、仮設住宅の準備が進んでいました。午前中に会った市長の話では、「仮設住宅の用地確保に苦慮している。」とのことでしたので校長に聞くと、「校地は全部使ってください。入居の抽選なんかしないで済むように全員が入れるようにしてください、と言ったんですよ。体育の授業なんて工夫次第でどこでもできるし、それよりも『自分たちの在籍中は運動場での体育はできなかったけど、地域の人が喜ぶことに役だった。』という経験の方がよほど教育的な価値は大きいと思うから。」とのこと。教育者としてのこの視線の高さに敬意を感じずにはおれませんでした。そういう校長の決断に対して、地域の人が学校に寄せる信頼は絶大でした。この校長は、「家に帰っても避難所が気になって眠れないから」と、被災当日以来、3日を除いて住民と一緒に体育館に寝泊まりしているそうです。

○今回の被災地視察で一番学んだことは、「善意の押し売り」ということと『主体は避難された方である。』ということでした。知らず知らずのうちに、「せつかく送った救援物資が活用されないのはもったいないなあ。」というようなことを感じていたのですが、それは被災者にとっては大きなお世話です。必要かどうかは主体者にあるのだという一番当たり前のことを忘れていました。送ってもらった物資を利用するかどうかを選ぶのは避難されている方の自由な主体性です。送ってくれた人の善意が先にあるわけではありません。宮古市の平井会員は、私たちが泊まった朝早くに「避難所の朝食はもらえないかもしれないと思って・・・」とおにぎりを持って来てくれました。また、前日に藤尾会員から紹介された盛岡市の校長先生は、「遠くから来てくれたのでどうしても食べてもらいたかった。」と早朝に陰しい山に入り、山菜の王様と言われるシドケを採ってきてくれて料理して出してくれました。お二人の行動は、どっちが地震に苦しんでいる側かと思えるほどでした。どちらも自分の主体的な考えから出たありがたい行動です。地元の方の話で、「自己PRにするようなボランティア団体もある。」と伺いました。上から目線の「支援してやっている」というような態度だったのかもしれませんが。お二人の行動とは大違いで、支援のときの心の有り様を学ばせていただいたと思っています。

もう一つ強く感じたことが、こういうときこそ学社融合の町は避難所でも機能しているということです。「避難所は、みんなコミュニティの仲間だから仕切りは不要。同じ苦しみを体験したから、さらに地域がまとまることになる。」と言って、プライバシーを主張して低いながらも仕切りをするべきだという人に対していた地域のリーダー的な古者。いったんは親類に身を寄せても、「ここより居心地が悪いから」と、また避難所へ戻ってくる人たち。当たり前のように食事や掃除当番制の仕組みができてみんなで良い環境にしようとしていた避難所の人たち。「住民を知っているので全員を助け出せた」という集落。こういう地区では校長も、「校地は全部使ってください。・・・」という教育者としての視線の高さが生まれてくるのではないかと思います。そういう校長の決断に対して、地域の人が学校に寄せる信頼は絶大で、学校が地域の中核として存在感をますます強めていっているのも当然と感じました。

その一方で、権利意識の強い知識人の多い地区では、しっかりした自分の家に居るにも関わらず「私たちの分もあるはずだ。」と避難所用の支援物資を強奪(?)して行く人もいたとか。またこれまで行政に要求をすることの多かった地区(町)では、自治組織がなかなか立ち上がらなかったとも聞きました。コミュニティが機能するような日常であったかということがこういう場になって如実な違いとなって表れたのだらうと思います。

その他のことでは、私たちが一夜を過ごした赤前小では、食事の量も栄養も考えられていたし日中に外へ出て行く人には、おにぎりを持たせていたというボランティアの心配りがありました。また東北特有かもしれませんが、親類の濃密な関係のおかげで震災孤児はいないということでした。薄くなったと言われる血縁関係の大切さを思うと共に、そうでない地区でのコミュニティの役割が改めて問われるように思いました。

それらのもろもろを含めて、今こそ、国が大きな方針の下に国作りを考えるとときであろうし、私たち一人一人も(融合研としても)市民の立場からの国づくりを真剣に考えるときだと実感しました。(M)

(2~5回目の支援活動は割愛します)

○2012年3月28日から強行スケジュールでしたが、東北へ行ってきました。今回は、避難所になったり仮設住宅になったりしている学校の先生が転勤になることもあって、駆け足でご挨拶に行ってきました。懇親会(送別会)に飛び入りしたこともあって、「地元の人には話せないよ」ということも耳にしました。可能な限り報告します。

○3月28日(金)朝8時、「雪だから気をつけてきてね」という助言のもと千葉を発ち、ほぼノンストップで紫波町へ。ここで藤尾会員に現地の道の駅を案内してもらって土産のワイン等を仕込み19時に宮古市へ。大阪フォーラムでも事例発表していただいた赤前小学校の及川校長の送別会が仮設住宅の自治会主催で開催されているというので参加。途中で電話した平井会員もまぼろしの焼酎持参で合流。仮設住宅に住んでいる人全員が、「校長には世話になった」「この校長がいなかったら仮設はさびしいものだったと思うよ」「こんな校長いないよ」と別れを惜しむ声が会場に充満。漁を再開した人が提供してくれた毛ガニが一人一匹ずつ、またその他にも手作りの酒肴が満載。以前伺った時に知り合いになった島根県の隠岐の島出身の人とも長く話し込みました。酒がまわるうちに話がかなり個人的なことにも。その中には、

○家族や知り合いをすべて亡くした人が、「朝起きてもおはようと言う人も、おやすみなさいという人もいないんだよ。」という人。

○「出張で、関東に行っていたんだよ。テレビで見るだけで何もしてやれなかった自分が情けなくて……。ガソリンもないのですぐに帰りたいのに帰れなくて……」と、どうしていいかわからない自分を今も責めている人。

○「皆には言えないけど、自分の家は水はかぶったけれど残ったので簡単な修理で済んだ。でも、建てたばかりの弟の家は流され、兄弟げんかなんだよ。」と、だれの責任でもない人までがつらくなっている現実。

○家も家族も助かったので、避難所で食事の準備を手伝っていたら、全てを無くした人たちと感情が食い違うことが多くなり、「妻は5日で手伝いに行けなくなり、自分も人と会うのが怖くなってしまった。だから二人とも家に籠ることが多くなっちゃったんですよ。でも仮設に住んでいる訳でもないのにきょうは呼んでいただいて、これで前のように同じ仲間になれたような気がして本当にうれしかった。」という人。等々、赤前地区のように人々が関わりあっている地域さえこうなのだから、他の地区では如何ほどか…。

二次会にも参加して、流出を免れた近くの民宿に宿泊(素泊まり2000円)

○29日(土)朝、赤前小学校を訪ねて、昨夜のお礼と及川校長への最後の激励をしてから、そのまま仮設住宅の集会場へ。この仮設住宅は、朝から人が集まってきては情報交換や話をしています。こういうことはコミュニティの結びつきを確かめる上でもとても大切なことだと思います。今朝も

大阪フォーラムでも発表して下さった自治会長の佐々木平一郎さんや地区の有志がいました。ひとしきり話をした後外へ出ると、隠岐の島町から嫁に来たという昨夜の方が外の日差しを浴びて同じ仮設住宅の人と話していました。私たちの姿を見つけると、ニコニコして「家に上がってお茶を飲んで行ってください。」というのでお邪魔しました。「津波に流される前はもっと大きな家だったんだけど、みんな流されてしまったのでこんな狭いところすみませんね。」と、悔しさが滲み出てくる話しぶりでした。

○その後、鉾が崎小学校へ4度目の訪問をしました。この校長先生も転勤ということを知ったので、「ずいぶん転勤が大幅なんですね。」と確かめると、「岩手県は、去年は震災で人事を凍結した部分があったので、いわば2年分の人事なのでどうしても大異動なんです。でも、赤前小の卒業生が通う同じ校区の中学校なんです。」とのこと。これは良かったと思いました。鉾が崎小学校は、学校や地域で防災教育に取り組んでいる子供を検証するための「ぼうさい甲子園」で平成19年度に続いて今年も優秀賞を受賞した学校です。総合的な学習を、産業等だけでなく地域との防災という観点からも地道に続けてきた学校です。その内容を伺って、受賞に値する実践だなあと実感しました。

○津波で大被害を受けた田老町の道の駅で昼食をとり、千葉への土産を少し買って、融合研会員でもある普代村の教育長「熊坂伸子さん」のところへ行きました。昨年の方針にも原稿を寄せて下さったので(12ページ)、その内容はご覧になった方も多いと思いますが、ここでは改めて先人の知恵と行政の先見性について感動しました。明治や昭和の大津波の経験から、地元の多くの反対の声を押し切って多額の費用で設置した普代水門が、学校にいた中学生や保育園児と教職員をすべて守ったのです(小学生は下校済み)。水門の外側は津波の爪痕が生々しく残っているだけに、行政(村長)の決断の素晴らしさに感服しました。

○この日は、普代村の国民宿舎に泊まりました。風光明媚なうえに波静かで、どこに津波があったのかと疑うほどでした。いつだったか「海で暮らしていると、海の営みからすれば津波なんて小さなことなんだ。だから、もう海には魚も海藻も今まで通りになっているんだ。海を憎むのではなく、海の恩恵に感謝しながら海と共存していくことが人間の知恵だなあとおもうんだよ。」と言っていた人がいましたが、本当にそうなんだなと思いました。

○30日(日) 有名な「海を真っ赤に染める朝日」を雲間に見ながら目を覚ましました。本当に素晴らしいところです。きょうは、海岸沿いの一般道をずっと下って福島まで向かいます。

普代村から三陸鉄道の沿線を通りました。駅があっても鉄道が破壊されているところやトンネルが開通していないところ、周辺の町が復興していないところ等々がありました。近々一部区間が復旧するということもあり、光明を見出した感じでした。宮古市から山田町に入りました。10か月前はがれきの山だったところも、少しだけ片付いていました。「牡蠣小屋」の看板を見つけて少し食べようと入ると、「ここは食べ放題だけなんで、朝食を食べたばかりなんじゃ、お金を払っても元を取れないと思いますよ。」と親切に言ってくれました。その言葉に、震災で少しでも金に換えようという思いはあるだろうに、こういう誠意を見せてくださる東北の人情に改めて応援したくなりました。

○その後、紫波町に避難していた人がいるという大槌町を見ました。井上ひさしの「ひょっこりひょうたん島」のモデルの島も見ながら、復興の遅れが気になりました。入り江という入り江はどんな小さな集落でもすべて津波の被害にあい、がれきが積み上げられ復興が遅れていました。水(海)は平らに進むので、大小の町に関係ないのです。小さな町ほど復興の手が後回しになっているように感じてしまいました。いろいろと難しいのですが、厳しいところほど早く復興してあげればいいのと思いました。

○昼ごろに釜石市へ入りました。鉄鉱の町でもあるので漁業中心の他の市町村よりも市全体としては影響が少ないのかなという感じがしたのですが、どの町よりも復興が遅れているという感じでした。壊された家の一部がまだそのままだったり道路の復旧もまだ遅れたりしていました。漁港はまだ機能している感じではなく、漁業以外にも産業があることが逆に復興の遅れになっているのかと思いました(表面的にしか見ていないので違っているかもしれません)。

○車でしたので続けて「大船渡市」「陸前高田市」「気仙沼市」「南三陸町」と一応すみずみまで駆け足で見回りしましたが、みた感じでは、自治体によってこれほどまで復旧に違いがあるのかと

ということが気になりました。自治体の努力を後押しするような国レベルでの復旧大綱がもっときめ細かく行われる必要があると思います。復興庁もできましたが、どこで聞く言葉も「かえってやりにくくなった」とか「なぜ、地元を分かりもしない人たちが査定して○や×を判定するのだ」「使い勝手の良い復興予算にしないといつまでたっても復興ができない」というようなものでした。被災地以外の市民としてできることが何なのかということを考えました。

○宿泊地の福島県郡山市へは夜9：00頃につきました。途中のパーキングで、「こんなに安く売ったら採算がとれないだろうに」というような農産物が多くありました。福島県の作物への風評被害とそれに対する値引きについても心が寒くなりました。(M)

※この支援から情報を得た宮古市の方と隠岐の島町の実家の方とのふれあいの様子は、年報第9号の論文に掲載されております。

【第2回】

は～い、ユーくん～す！

関嘉民（よしたみ、たみちゃん）さんと次男の潜展（せんた、27歳）との「冬芽合唱団の3人トリオ」が2011.4.15から4.19まで東北行脚してきました。

東北道をクルマで6時間かけてまずは仙台入りしたのですが、途中の福島までは桜の冬芽が大合唱。でも宮城県に入るとまだ冬芽でした。

で、レーテルさんの野澤令照さんがこの4月から校長に着任した仙台市立寺岡小学校に午後4時頃に到着。

で、3月末まで市教育委員会の教育次長として仙台市内の全被災学校の状況把握や対策を陣頭指揮していたレーテルさんから市内の被災の状況をつぶさにお聞きし、これからの行脚に身が引き締まる思いがしました。

でも、ぼくたちトリオは、子どもたちや教職員と被災の人々を励ますために来たんだからと気を取り直し、放課後なので子どもたちは帰宅していましたが、さっそく教職員さんに紙芝居をしました。その写真を添付します。

出しものは、前日にたみちゃんのつれあいの知磨子さん（融合研マークの制作者、劇団蚊帳の海一座の座長）が福島原発にヒントを得て創作完成したての「黄金キャット」です。

みなさん、けらけらと笑い、大受けでした。

で、夜は3.11から5週間も駆けずり回った融合研仙台組の慰労と「情報交換会」を名目にした「アレの会」。

で、その席でもたみちゃんが紙芝居をしました。

その演目は、たみちゃん創作の「夜の動物園」。

これまた大評判、大受け！

その評判は、帰京日の4.18に市内4か所で演じさせていただいたことになりました、とさ。

で、集合写真と仙台駅に掲げられた「がんばろう東北！」の看板写真も添付します。

で、クルマで泊の予定でいたトリオは、レーテルさんと融合研姉妹の5女である野澤桂子さん宅に宿泊させていただきました。

ということで、第一回報告です。

では、アディオス！ アミーゴ！

たみちゃん、せんたとの東北行脚2は、岩手県の藤尾智子（ともちゃん）さん在住で手配をいただいた紫波町編です。

仙台のレーテルさん宅に泊めていただき、翌日4月16日（土）朝発ち、東北道を北上して昼ごろに紫波町入り。

で、子どもと高齢者の居場所であるNPOぬくもりで、地域の人の手づくりのおいしいお弁当をいただきました。

仙台もそうですが、紫波町でもなんだか私たち3人トリオがご支援をいただく感じ。

ま、いいか！甘えちゃえ！

で、ここから本番。

・津波で壊滅状態で町長さんも津波でお亡くなりになられたあの岩手県大槌町の吉里吉里地区（井上ひさしの小説のモデルの地区）からの被災の人々がいらっしやる志和公民館（紫波町にある志和です）で、紙芝居と本のプレゼント開始。

・紫波町と吉里吉里地区とは、26年間も子どもの交流（互いの民家に泊まり合う）をしているそうで、そのご縁からだそうです。

・学校のことがあるので小学生の家族はすでに親戚などを頼りに他の地へ移り、中学生と高校生と、ほとんどは高齢者でした。

・紙芝居も本も、とても喜んでいただきました。写真を2枚添付します。助手役がせんたです。独身です（関係ないか）。

<エピソード>

たみちゃんが、50年前の街頭紙芝居で実際に使われた「ガンマ王子」を1から続けて3まで演じ、「この続きは本当は57作まであるのですが、私は3までしかないので」と言うと、聞いていた中のおばあちゃんが「じゃあ津波に流されたんだ！」と大きな声で言いました。

私は一瞬「ドキ！」としたのですが、まわりのおばあちゃんたちが大笑いしたのです。

その様子にたみちゃんも床にずっ転げたらまたまた大笑い。

ともちゃんやお世話をするボランティアさんの話では、1週間目は出たものを食べるだけで2週間目はおかわりをするようになり、3週間目は少し残すようになり、4週間目でやっと冗談がでるようになったそうです。

で、今の5週間目には、紫波町の人に誘われて「じゃがいもの種付け作業」をするように変わってきたそうです。

でも、この先1年もここにいることになるかもしれません。

長期の支援が必要なことを痛感しました。

2か所目は、

・学童保育所のひとつである「なかよし広場」です。

・20人ほどの小学生に紙芝居と本をプレゼント。

・都市部の学童保育所では考えられないほどの部屋数と全体が広いスペースの学童保育所でした。

・紙芝居の写真を添付します。

で、夜は、昼食をいただいたNPOぬくもりの理事長である小田中次男さんのご配慮で、紫波町のお店でまたまた「アレの会」。

で、「岩手県の地酒を飲むのも支援だ！」とヘンな理屈をつけて紫波町の地酒を頼んで「堀の井」をガンガン！

あっ、仙台でももちろん宮城県産の地酒をいただきましたよ。

で、この日もクルマで泊まる予定でいたのに、ともちゃんの手配で造園業を営む瀬川勲さんのお宅に泊めていただきました。

ともちゃんの話では、「ボランティアを支援することも支援なのよ」とのこと。

なあるほど、と納得して甘えさせていただきました。

ちなみにおつれあいさんは、わが融合研の長女である宮崎雅子事務局長と同じお名前の「まさこ」さんでした。ご縁でしょうか。

てなこと、2日目でした。

あっ、お風呂は被災者の人々もお入りになる紫波町営温泉の「ラフランス」でやんした。

酒局部長でワイフの車育子（ちゃ ゆっちゃ、通称チャンちゃん）さんに「なにを優雅にやってんのよ！」と帰京したら怒られそう。

では、アディオス！ アミーゴ！

たみちゃん、せんたとの東北行脚3は、ともちゃんが17日にと平井二三子さんが18日に報告してくれた宮古市編です。

補足と写真を添付します。

元宮古市教育委員長の平井二三子さんのご配慮で、融合研会員でもある宮古市長の山本正徳さんには、宮崎稔会長からの伝言を伝え、融合研としても何らかで長期間ご支援させていただきたいとの意向をお伝えしました。

また、市長は坂下昭弘教育委員長をご紹介くださり、融合研と教育委員会ルートでの幼稚園児（都市部）から小中学生（高校生は県教育委員会か）へと教職員への支援の糸口をつかみました。

同時に市長部局の保健福祉部福祉課子育て支援室主査の山崎進様もご紹介いただき、教育委員会ルートでは把握しきれない保育所や避難所で生活する乳幼児や親への支援の糸口もつかむことができました。

つまり、融合研らしい支援のあり方は、大きく分けて2つのルートと思います。

A：義務教育学校を把握していて教職員とつながる市区町村教育委員会ルート

B：首長部局が担当の保育所などの福祉部局ルート

ということになろうかと考えました。

Aルートでは、月～金の開校時間帯での授業時間中の学社融合的な支援

例えば紙芝居を国語や特活の授業として実施していただく、融合研の会員の学校支援地域本部事業の出前など。

Bルートでは、放課後や休校日の土日、夏休みなどの長期休暇の時間帯など。

例えば昼の保育所、放課後や休校日の児童や生徒には放課後子ども教室の出前、児童館（仙台市は子供未来局担当）には冒険遊び場協会の実践など。

が実施可能ではないかと考えました。

なお、週末にこども環境学会で添付の「子どもたちに支援を！緊急集会」を開催します。

私も今回の状況を話すと同時になんらかの提携を模索したいと思います。

あっ、今（22：45）東京でも地震がありました。

余震で東北のみなさんの大変さを感じています。

では、つながろう！アディオス！ アミーゴ

第3団の厚木市の融合研会員による復興支援活動の様子は冊子になってまとめられています。ほしい方は、神奈川県支部長（厚木市）の青木信二さんに声を掛けてください。

○「東日本大震災復興支援実行委員会」 会計報告

収入の部 367,526 円

（内訳）

・ 寄付	310,014 円
・ フォーラムせり市・CD売上	57,500 円
・ 利息	12 円

支出の部 365,377 円

（内訳）

① 2011.7/6～7/8（2泊3日）	紫波町～宮古市	2名
宿泊費		19,000 円
ガソリン		13,847 円
高速代		10,350 円
食費 2000×2人×3日		12,000 円
計		55,197 円

② 7/31～8/4（4泊5日） 仙台市～名取市～亶理町～宮古市～紫波町 3名

ガソリン	29,047円
駐車場代	1,700円
食費 2000円×3人×5日	30,000円
紙芝居・バナナ	16,185円
計	76,932円

③ 9/9～9/14（5泊6日） 仙台市～紫波町～宮古市 2名

宿泊費	26,000円
ガソリン	11,224円
高速代	無料
食費 2000×2人×6日	24,000円
計	61,224円

④ 11/5～11/6（1泊2日） 石巻市～仙台市 3名

宿泊費	15,000円
ガソリン	12,763円
高速代	11,960円
食費 2000円×3人×1日	6,000円
計	45,723円

⑤ 11/16～11/18（2泊3日） 仙台市～宮古市 2名

宿泊費	6,000円
ガソリン	11,000円
高速代	12,650円
食費 2000円×1人×3日	6,000円
計	35,650円

⑥ 12/21～12/23（2泊3日） 仙台市～紫波町 2名

宿泊費	18,400円
ガソリン	10,358円
高速代	5,800円
食費 2000円×2人×3日	12,000円
計	46,558円

⑦ 2012,3/28～3/31（3泊4日） 紫波町～宮古市～普代村 2名

宿泊費	18,000円
ガソリン	10,098円
食費 2000円×2人×3日	16,000円
計	44,098円

残高 2,149円

○寄付のお願い

上記の会計報告でもお分かりのように、実行委員会の活動資金はすべて会員や趣旨に賛同する方からの寄付に頼っております。今後、しかるべき団体等の補助金申請も検討してまいります。現状では資金が底をついております。そこで、今年もみなさまからの寄付をお願いしたいと考えております。どうぞよろしくお願ひします。

(寄付受付口座)

ゆうちょ銀行・店名008・普通口座・口座番号9648309

名義；学校と地域の融合教育研究会東日本大震災復興支援実行委員会

○「こんなことで支援できます」の登録のお願い

会員のもつ多様な技術を登録していただき、被災地へ提供していくようにしようということが役員会で話し合われました。ちょうど、昨年のお阪フォーラムで行われた「めっちゃオモシロ講座」のようなことをイメージしております。登録票の「例」にならって、多くの方が記入していただけるようお願いします。この登録票を被災地へ提供して、現地と会員の希望日時等がマッチした段階で、支援に行くという形をとりたいと思います。

(この表は、ホームページ上に掲載しました。この表の赤字にならって、その下段に記入して事務局までお送りください)

東日本大震災支援可能なこと 登録シート				
登録者名 できること・お住まいなど	1	融合 太郎	融合研会員 市読み聞かせボランティア	A県 A市
	2	融合 花子	主婦	A県 B市
	1			
	2			
	3			
主な対象	小学校低学年・高齢者			時間 20～45分
講座内容	絵本や紙芝居を見て楽しむ。			
希望場所	屋根のある部屋・晴天なら屋外でも可能			
その他	希望受講人数(20人まで)、お借りしたいもの(電源・スクリーン・電子レンジ・長机)、補助者が2名必要等、記入ください。			

3 大阪フォーラムの報告

○全体会、分科会報告

1 シンポジウム

【テーマ】 地域コミュニティどうしたらええんや！～人と人をつなぐ学社融合～
<パネリスト>

- 前川喜平(文部科学省大臣官房総括審議官)
- 堤 祐子(仙台市教育センター主任指導主事)
- 木村泰子(大阪市立南住吉大空小学校校長)
- 大阪府池田市立池田中学校(栢木修教頭+三宅正起首席+小国喜弘東京大学准教授)
- ◇コーディネーター：岸 裕司(融合研副会長・秋津コミュニティ顧問)

このシンポジウムでは、民主党政権が掲げる「新しい公共」型学校や、文部科学省が推進する学校支援地域本部事業・放課後子ども教室事業から、全国的に設置が進むコミュニティ・スクール、開催地の大阪府と大阪市が推進する地域コーディネーター制度や、3.11 東日本大震災での学校とコミュニティの協働などを話し合った。

前川さんには直前のミニ講演を受けて、「新しい公共」型学校が掲げる「地域住民の学校運営への参画の促進」「地域力を活かした学校支援」「学校力を活かした地域づくり」の3点による「地域と学校の共助」の具体像についてお話しいただいた。

特に、図で丸囲みの「学校力を活かした地域づくり」については、これまで学校支援はあっても「地域づくり」はなかった視点からこのポイントもお話しいただいた。

※『「新しい公共」型学校の創造事業』のイメージ図 文部科学省のHPより

「新しい公共」型学校創造事業

～「新しい公共」がつくる「新たな学校」と「元気なコミュニティ」

平成23年度要望額 200百万円（新規）

<概要>

「新しい公共」型学校創造事業は、「地域住民の学校運営への参画の促進」、「地域力を活かした学校支援」、**「学校力を活かした地域づくり」**の観点から活動を行い、学校と地域の共助体制によるコミュニティ・ソリューションの核となる「新しい公共」型学校のモデルを構築するとともに、共通に求められる要素を明らかにすることを目指す。（16箇所）

<背景>

◎ 地域と連携した学校づくりの進展

- コミュニティ・スクールの制度化(H16～)
平成22年度実施数 629校
- 学校支援地域本部事業(H20～)
平成22年度実施数 2,528本部
- 放課後子ども教室推進事業(H19～)
平成22年度実施数 9,280教室



◎ 成果

- ・学校と地域との連携の仕組みづくり
- ・子どもの学力や意欲の向上
- ・教員の意識改革、負担軽減 など

◎ 課題

- ・地域を巻き込んだ学校マネジメントへの改善
- ・学校支援の人材の拡大
- ・持続的な取組にするための組織の在り方、資金の在り方
- ・学校を取り巻く地域自体の活性化 など

これまでの成果と課題を踏まえた次世代の学校づくりが必要



地域と学校の共助による

「新しい公共」型学校

それを受けた形で、まさに「地域と学校の共助」での以下の3つの実践のお話しを伺った。

1. 仙台市の堤さんは、3.11 被災時には前職の仙台市立東宮城野小学校教頭としての大変なご体験や、その後の仙台市での復興に向けての展望などをお話しいただいた。

堤さんのご体験は、『年報 学社融合 2011』に「東日本大震災～その時、今、そして未来へ～」をお書きいただいているのでぜひお読みいただきたい。

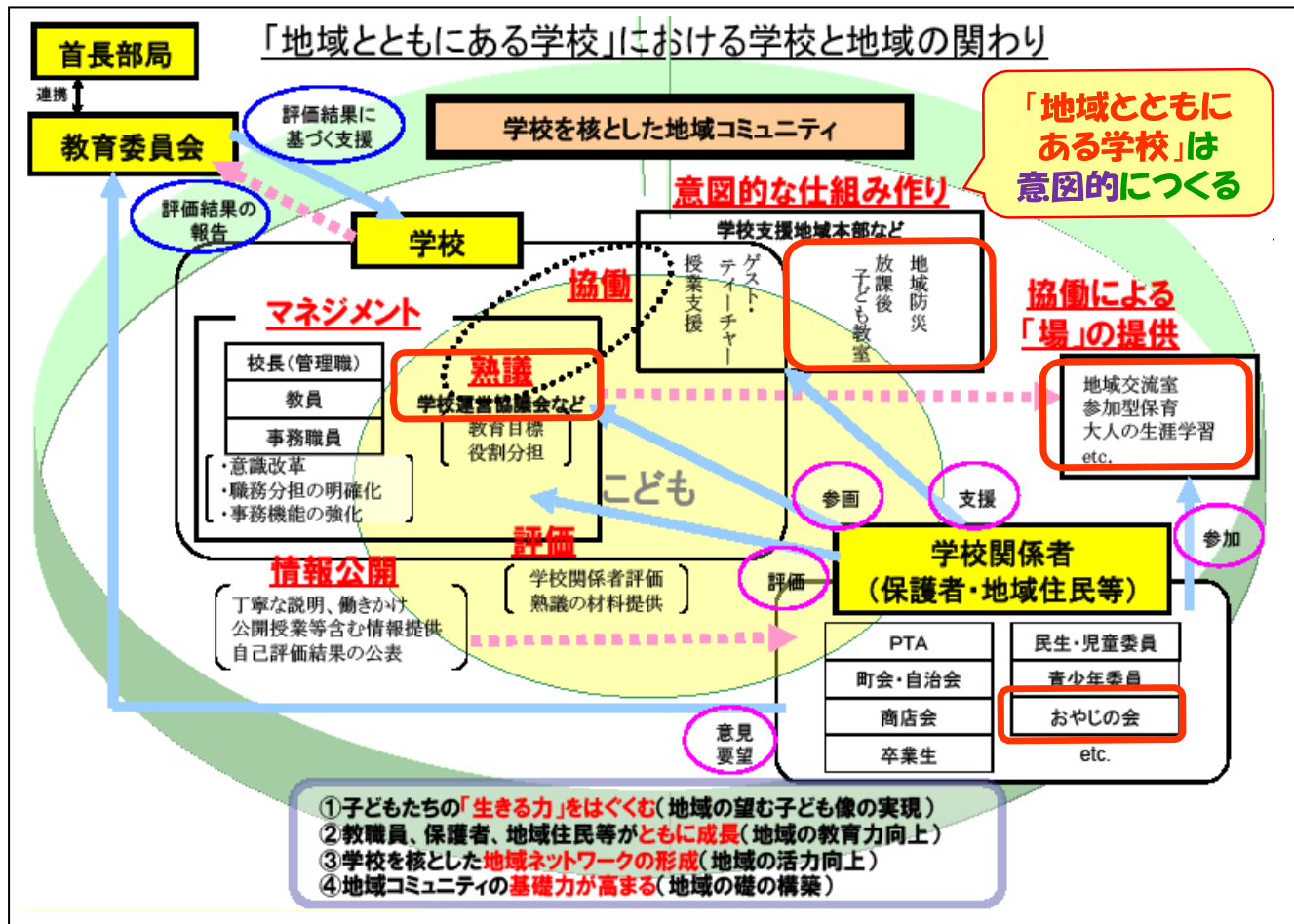
2. 開催会場校の木村さんには、ちょうど大阪選挙・冬の陣のさ中にご準備いただき、同校が掲げる「新しいタイプの学校づくり」や「『ふれあい科』の創設」などについての「大空小学校の魅力」を存分にお話しいただいた。

3. 池田市立池田中学校からは、栢木修教頭+三宅正起首席+小国喜弘東京大学准教授のお三方に登壇いただき、同校が「学校を核にまちづくり」を推進する「マイタウンプロジェクト (MTP)」についての実践と組織についてお話しいただいた。

同MTPは、直前に「学校応援団地域による優れた学校支援活動に対する初の文部科学大臣表彰」を受賞したので、その報告もした。会場から拍手が沸いた。

さて、3つの実践とも、学社融合を推進する「地域に開かれ、地域とともに歩む学校づくり」の有効性を見事に示している。

また、国の最新施策である「地域とともにある学校」のイメージ図をスライドで投影し、シンポジウムのテーマである「地域コミュニティどうしたらええんや!～人と人をつなぐ学社融合～」の確かさを確認した。



○分科会の記録

第2分科会記録(高田一宏)

- ・発表者(発言順): 福島功(大阪市教育委員会)、佐々中雄司(大阪府教育委員会)、村口飛鳥(大阪市立南住吉大空小学校教員)、岩切美恵子(南住吉大空小学校・はぐくみネットコーディネーター)、明貝一平(「OSAKA きっずなー(大阪府地域コーディネーター連絡協議会)」会長)
- ・コメンテーター: 渡邊喜久(富士宮市立芝川中学校前校長・融合研副会長)
- ・コーディネーター: 高田一宏(大阪大学)

第2分科会では、まず、福嶋さんと佐々中さんより「はぐくみネット」と「すこやかネット」の理念や行政施策について報告をしていただいた。「はぐくみネット」は平成 14(2002)年度から 5 年がかりで大阪市内全ての小学校区に設置された。一方、「すこやかネット」は、それに先行して、平成 12(2000)年度から 3 年がかりで大阪市を除く市町村の全中学校区で設置された。「すこやかネット」と「はぐくみネット」の成り立ちは異なるが、両報告からは「地域の子どもを地域で育てる」という理念に違いはないことがあらためて確認できたように思う。

ついで、村口さんと岩切さんより、写真スライドを織り交ぜながら、南住吉大空小での取り組みを報告していただいた。子どもと大人のふれ合いや異世代交流が「自然体」で行われ、地域の人びとと教職員が皆で子どもを育てようとしていることが伝わってくる報告だった。さらに、明貝さんからは、大阪府の地域コーディネーター連絡協議会(OSAKA きっずなー)の紹介とともに、地域コーディネーターとして、独居高齢者などの「ひとりぼっちの人」の「居場所」づくりに力を注いできたとの発言があった。

以上の報告を受けて、コメンテーターの渡邊さんは「子どもの姿」から成果を語ることの大切さを指摘された。コーディネーターの立場からみても、大空小の報告はまさにそのようなものだったように思う。さらに、渡邊さんは、成果だけでなく成果をあげるまでの苦労や現在の課題についても交流する必要があると提案してくださった。

その後の意見交換では、学校を「開く」ことの難しさに議論が集中した。明貝さんからは、地元での活動の経験をふまえて、地域側が取り組みの責任を引き受けることで、トラブル発生や多忙化に対する学校側の心配を払拭できるのとの指摘があった。また、大空小のお二人からは、子どもたちや教育活動のありのままの姿を地域の人びとにみてもらうことの大切が語られた。大空小では「みんながつくるみんなの学校」という考え方のもと、様々な人びとが行き交う空間や機会が生まれているようだった。

「すこやかネット」と「はぐくみネット」が誕生して約 10 年になる。この間、大阪では学力問題への対応が教育行政の重点課題となった。教職員の世代交代も急激にすすんでいる。大阪の「学校と地域の融合教育」は決して順風満帆とは言えない。だが、志を同じくする者が交流して元気を与え合うことができるのは融合研ならではのよさである。関係者には、地域や立場を超えた融合研のネットワークを今後の活動に生かしてほしいと思う。個人的にも、経験に裏打ちされた現場の知恵を沢山学ぶことができたのは、今回のフォーラムの大きな収穫だった。だが「よい話を聞けました」だけで終わってはつまらない。研究者には現場の知恵を体系化・理論化するという仕事がある。宿題をもらった気分である。

第3分科会 【テーマ】 地域コミュニティの再構築

<発表者>

○市場達郎 (大阪府大阪市立南住吉大空小学校教頭)

テーマ; P T A活動どうしたらいいねん

○衛藤 裕 (大阪府池田市立池田中学校教諭)

テーマ; コミュニティを担う「人間関係づくり」

○藤尾智子 (岩手県紫波町生活部福祉課長)

テーマ; ユニバーサルデザイン~誰もが使いやすい・楽しめることから

◇コーディネーター: 宮崎 稔(融合研会長・島根県総合教育審議委員)

この分科会では、

市場さんは、開校間もない大空小学校において、「子供を真ん中において学校と保護者がい

かにしてつながり、子供にとっては楽しく、大人にとってはやりがいのあるPTA活動」を模索しながら取り組んだ事例を発表された。役員をなくしてプロジェクトチームを保護者からの公募で活動を始めたが、組織の改編が迫られ、PTA活動の全面見直しによって、「やるべきこと」と「やりたいこと」が明確になって、みんながつくるPTA活動として前進した過程を説明されました。そうして、呼び名もPTAからSEA（S；サポーター、E；エジュケーター）と変えて、父親も参加しやすくしたりして、リーダーの立候補者が半数近くになるという快挙（？）の裏には、「学校が常に開いていること」「であるということ」を説明されました。

衛藤さんは、荒れていた学校が職場体験学習をきっかけにして「MTP（マイタウンプロジェクト）の取り組みを通して、子供たちの健やかな成長を応援する活動が市民にも知られるようになり、NPO団体として活動するまでになり、今やMTPの活動が地域の大きなエネルギーになっているという発表があった。また授業づくりも地域の力を借り、「よのなか科」という授業では、世の中の諸問題を子どもと大人が一緒になって考え、正解ではない「納得解」を見つけるといように取り組んでいるということや、若い教員が増えてきている中で従来の授業研究の手法にとらわれないMJK（未来人権フォーラム）を取り入れ、教師の力量を高める新しい教育システムの構築にも取り組んでいるという発表がありました。

藤尾さんは、これまであまり例のなかった高等学校を事例とした発表でした。地元の総合高校は、多様な科目の中から選択履修が可能であり、進路への自覚を深める学習ができるという特徴があります。その中で社会福祉実習を例にして、ユニバーサルデザインを、NPO法人と町の福祉課や社会福祉法人が一堂に会して話しあったということからスタートしたことや、授業展開のコーディネータに福祉課も関わり、関係機関との連携で授業ができるようにしたこと、NPO法人は班ごとにファシリテーターとしても授業に関わったことなどを話されました。こうして育った生徒たちは町へ出ていき、1か月の施設体験をし、今では町の構成員として消防演習や夏祭りにも参加してくれるようになったということでした。授業は通年でかかわれるので、新しいユニバーサルコミュニティができつつあるという示唆に富んだ発表でした。

時間的な制約もあってあまり多くの意見を取り上げることはできなかったのですが、コミュニティの再構築へ向けて、学校内の努力と保護者や地域を巻き込み継続・発展していける方策、そして行政の関わりのある方等の視点から、「できる人が、できることで」「息の長い」活動になるようにということが熱心に話し合われました。

記録（文責：宮崎 稔）

※その他の分科会の記録は、手違いにより掲載できません。詳細は、「大阪フォーラムのDVD」としてまとめられております（有料）。申し込みをしてください。

4 役員会の報告

① 総会について

規約に基づく年1回の融合研の総会はフォーラムの際に行っています。しかし、フォーラムに参加できない会員にも総会で意思表示をしていただけるようにということで、通信による返信をもって総会に参加していただくということにさせていただいております。その返信分とフォーラムでの総会出席者を合わせて成立の運びとなります。

フォーラムに参加されない方は、

○インターネットから

○印刷物会員の方は、同封の葉書で

意思表示をしてください。

※インターネットで意思表示される方は、ホームページ上に掲載しましたので、そこから事務局までお送りください。

総会の議案

- (1) 平成21年度事業報告
- (2) 平成21年度決算報告
- (3) 平成22年度事業計画(案)
- (4) 平成22年度予算(案)
- (5) 平成22・23年度役員(案)

(1) 平成23年度事業報告

- 23. 9. 23 役員会 場所;パンゲア
- 23. 11. 26~27 第15回融合フォーラム in 大阪 場所;南住吉大空小学校
- 23. 12. 29 役員会 場所;パンゲア
- 24. 1. 22 仙台ミニフォーラム 場所;宮城学院女子大学・仙台市立加茂小学校
- 24. 6. 2 千葉支部研修会 場所;篠原学園
- 24. 6. 3 役員会 場所;パンゲア

(2) 平成23年度決算報告

- 収入の部…………… 1, 393, 858円

- (内訳) 繰越金 1, 055, 650円
 - 会費(3000円×112人) 336, 000円
 - 資料代(1000円×2) 2, 000円
 - 利息 208円

- 支出の部…………… 685, 491円
 - (内訳) 通信費・送料 30, 610円
 - 事務用品 16, 220円
 - ドメイン料 4, 100円
 - 印刷代 1, 460円
 - 年報代(送料含む) 341, 720円
 - 会議費 31, 669円
 - 役員会交通費補助 50, 000円
 - 支部フォーラム補助 200, 9712円 (備考;大阪、仙台、千葉)

- 残高…………… 708, 367円

監査の結果、適正に処理されていることを認めます。

監査 小山みさ

車 育子

(3) 平成24年度事業計画(案)

- 24. 10. 20(土)~21(日) 第16回融合フォーラム2012 in 東北
場所 仙台市旭ヶ丘小学校ほか
- ※24. 10. 26~11. 18 文部科学省主催「全国生涯学習ネットワークフォーラム」
- 25. 5 千葉支部フォーラム 場所 篠原学園

(4) 平成25年度予算(案)

○ 収入の部	1,078,667円
(内訳)	
繰越金	708,367円
会費(3000円×120人)	360,000円
資料代	10,000円
利息等	300円
○ 支出の部	1,078,667円
(内訳)	
通信費	50,000円
会議費	50,000円
事務用品	30,000円
年報代	350,000円
ドメイン料	5,000円
交通費	100,000円
フォーラム補助	100,000円
予備費	393,667円

(5) 平成24・25年度役員案

会長	宮崎 稔	島根県総合教育審議委員
副会長	岸 裕司	(株)パンゲア代表取締役
同	油谷雅次	大阪府地域コーディネーター
同	野沢令照	仙台市立寺岡小学校
同	渡辺喜久	前、静岡県富士宮市立芝川中学校長
監事	小山みさ	市川市ナーチャリングコミュニティ
同	車 育子	(株)パンゲア役員
プログラム研究開発委員長	永谷貴弘	大学講師
子ども教室部会長	野澤令照	仙台市立寺岡小学校
東北・北海道支部長	野澤令照	仙台市立寺岡小学校
北関東支部長	戸叶俊文	館林市職員
千葉県支部長	常田 洋	市川市ナーチャリングコミュニティ
神奈川県支部長	青木信二	厚木市森の里中学校PTAパートナー隊
大阪府支部長	榎谷佳純	大阪府PTA協議会元副会長
島根県支部長	渋谷秀文	益田市小学校
高知県支部長	森本智香	書店経営
事務局長	宮崎 雅子	こどものまち副代表
事務局次長	佐々木 徹	厚木市役所

※事務局員についても、全員留任の予定です。

※上記の内容について、「ご意見」「ご質問」のある方は、東北フォーラムでの総会までに事務局へご連絡ください。議題としてとりあげさせていただきます。

○印刷物会員には、同封した葉書を返送していただきます。メール会員は、ホームページから返信してください。

※いずれの返信締切日も、集計作業の都合上10/15(月)(当日着)までとさせていただきます。

5 事務連絡

1 会員継続の更新について ※手続き完了日；仙台フォーラムまで。

融合研は、職場の配置転換等で会員としての活動が難しくなった人や個人的な諸事情で会員の継続が困難になった人を、むりやり会員として引き留めておくということをしない（いわゆる「幽霊会員をつくらない」）ということが確認されています。したがって、毎年、「今年も会員の継続をするかどうか」ということの確認を行っています。事務手続きが煩雑になりかもしれませんが、「通信による総会」の案内と一緒に返信をつけてありますので、以下のようにお願いします。

○メール会員は、ホームページからお返事ください。

○郵送会員は、同封の葉書でお返事ください。

※退会する方も、ご一報ください。再入会は年会費のみでできます。会員No.も復帰します。

※継続する方は、年会費（3,000円）の納入もよろしく御願います。

※すでに、24年7月以降に手続きをお済みの方は、連絡しなくても結構です。

② 大阪フォーラムのDVDの申し込みを

上記でも触れましたが、大阪フォーラムの様子が克明なDVD資料としてまとめられました。参加した人はもちろん、参加しなかった人もぜひ購入して活動に役立ててください。

6枚ディスク 1セットにして5,000円で、さらにおまけとしてダイジェスト版のミニ写真集を追加します

■主催 DVD頒布責任 学校と地域の融合教育研究会

■ディスク内容(総時間約15時間)

ディスク① リアルタイムビデオ・デジタル写真集(約10分)

ディスク② ミニ講演 前川喜平氏(約30分)

シンポジウム 地域コミュニティどうしたらええんや！(約110分)

ディスク③ 分科会①「学社融合でキャリア教育を」(約150分)

分科会②「はぐくみネット+すこやかネットとの融合」(約150分)

ディスク④ 分科会③「地域コミュニティの再構成」(約150分)

分科会④「学社融合は厳しい環境の子どもをどう受け止めるか」(約150分)

ディスク⑤ 分科会報告と提言(約60分)

本音で話そう！ワールドカフェ(約120分)

ディスク⑥ おまけイベント①「親学習」体験講座(約60分)

おまけイベント②「授業づくりの学習会 MJK」(約60分)

■価格；セット価格 5,000円

■お申込み方法

①FAXで FAX:078-796-2595 へ

A:お名前 B:電話番号 C:ご住所 D:購入されるディスクの枚数

②Eメールで メール:sowa-t@kobe-du.ac.jp へ

A:お名前 B:電話番号 C:ご住所 D:購入されるディスクの枚数

■お支払い方法 後日連絡します

■ご連絡先

神戸芸術工科大学 曾和研究室 曾和具之(そわ ともゆき)

お名前	
ご住所	
電話番号	
メールアドレス	
ご購入ディスク	枚

購入先
金額

③ 2013年度以降のフォーラム開催の立候補を受け付けます。

2012年度の融合フォーラムは、仙台市に決定し準備が進んでいます。多くの会員の参加をお待ち致します。また、会員以外の方へもお誘いください。

それから2013年度以後のフォーラム開催について、近隣の人と相談したりして手を挙げてください。自分ひとりだけでもその意向がある方は、「事務局へとりあえず相談」してみてください。「2014年度以降なら」という地域でも構いません。「今は、まだあまり推進されていないから」という地域でも結構です。フォーラムを機会に、融合の推進が図られたという地域もごございます。どうぞ、奮ってご応募ください。

④ 2013～2014年度の役員の立候補を受け付けます。

一部の役員を除き、多くの役員は発足以来ほぼ同じメンバーです。会の活性化を図る意味からも新しい血の導入も必要とされています。役員になって融合研を改革したいというご意思のある方は、是非、「事務局まで」意思表示をしてください。総会で、承認を得て決定となります。また、「2年後なら」という意思のある方もお待ちしております。

編集後記（のようなもの）

諸般の事務上の滞りのために会報の発行等が遅れることになってしまいました。会員のみなさまに、お詫び致します。会報は、メーリングリストと共に会員の声をつなぐ大事な手段ですので、16年目を迎えた今、融合研の地道な実践のために会員の意見を歓迎します。どうぞ多くのご意見をお寄せください。

10月20日は東北の仙台でフォーラムが開催されます。多くの皆様の参加をお待ちしております。 (M)